
$\Pi \alpha \nu \delta ? \rho \alpha$ —パンドラ—

宇宙の彼方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Παυδὸς παρὰ Πανδώρα

【Nコード】

N8344Q

【作者名】

宇宙の彼方

【あらすじ】

『ガチャガチャ』、この言葉に胸が躍っていた子供時代。

親から貰える一ヶ月のお小遣いとしては、少々高めの『百円玉』にすべての思いを込めて、入魂の如くレバーを廻す。

昔は『ハズレ』も存在し、落胆と共に『お粗末な景品』を持ち帰る者や、お小遣いを使い果たすまで、目的の景品を狙い続ける者もいた。

だが、時代の中で進化を続けて来たガチャガチャは、電子玩具や、

高級フィギュアなど、百円を超え三百円、中には五百円や千円もする様なガチャガチャが、現代の日本で、更なる可能性を見出そうとしている。

だが、未だかつて見たこともないガチャガチャが、日本のどこかで存在している事を、あなたは知っているだろうか？

ショートストーリー内で、支持があつた「黒いガチャガチャ」「黒い自動販売機」のシリーズ化、そして独立化した新作「Павлов? パンドラー」が始動しました。

物語の本筋は、黒いガチャガチャを管理する組織の謎を解こうとする者達との戦いですが、さまざまな読み切りショートストーリーを交えながら、結末へと進んでいきます。

第1話「おかえり」前編（前書き）

ショートストーリー内で、支持があつた「黒いガチャガチャ」「黒い自動販売機」のシリーズ化、そして独立化した新作「Παυδ ? ραーパンドラー」が始動しました。

物語の本筋は、黒いガチャガチャを管理する組織の謎を解こうとする者達との戦いですが、さまざまな読み切りショートストーリーを交えながら、結末へと進んでいきます。

第1話「おかえり」前編

『ガチャガチャ』、この言葉に胸が躍っていた子供時代。
親から貰える一ヶ月のお小遣いとしては、少々高めの『百円玉』
にすべての思いを込めて、入魂の如くレバーを廻す。

昔は『ハズレ』も存在し、落胆と共に『お粗末な景品』を持ち帰
る者や、お小遣いを使い果たすまで、目的の景品を狙い続ける者も
いた。

だが、時代の中で進化を続けて来たガチャガチャは、電子玩具や、
高級フィギュアなど、百円を超え三百円、中には五百円や千円もす
る様なガチャガチャが、現代の日本で、更なる可能性を見出そうと
している。

だが、未だかつて見たこともないガチャガチャが、日本のどこか
で存在している事を、あなたは知っているだろうか？

> i 1 8 1 4 7 — 1 3 3 3 <

Π α ν δ ? ρ α — パンドラ — 第一話「おかえり」

由佳^{ゆか}が死んだ。

凍^{たかお}てつく程に寒い夜。心電図が一定の機械音を鳴らす中、山上^{やまがみ}
隆生は、ただ呆然と、温もりを失ってゆく妻の亡骸の前で立ち尽く
すしかなかった。

病名は肝臓ガン。

治療する術はあった。だが、一歳になる長男の修斗^{しゅうと}を産むのか、

ガンの治療の為に産まないかの究極の選択を求められ、彼女は産む方を選んだのだ。

隆生としては、今回は子供を諦め、治療に専念して欲しかったが、由佳の強い思いと、この世の何よりも大事そうに見つめる膨らんだお腹を擦る姿を見ていると、治療後の奇跡に頼るしかなかったのだ。

結婚指輪が填められた由佳の手をそつと……ギュツと握り締める。

出会った頃、毎日のように握っていた手は、枯れ枝のように張りを失い、お互いに涙を流しながら填めた結婚指輪は、今では何かの拍子にスルリと抜け落ちる程だ。チャームポイントだった笑窪えくぼは無くなり頬がコケ、長く綺麗だった髪が全て抜けてしまった。これが抗癌剤の副作用の恐ろしさだ。

本当は、本人が体の変化に一番恐怖を感じていたはずなのに、隆生が修斗を連れてくると、いつも笑顔で笑っていた。

そんな闘病生活の苦しさ、由佳の闘いを見守ってきた隆生は、彼女の心が折れない為にずっと黙っていた言葉を口にした。

「よく頑張ったな……大丈夫……」

これまでの由佳との幸せの日々が脳裏を目まぐるしく駆け巡り、心に開いた穴から計り知れぬ程の喪失感と泣き叫ぶ悲鳴が、隆生の目から大粒の涙となって溢れ出した。

担当医は、死亡時刻を慣れた様子で隆生に告げると、今後の対応について看護師が説明を始めようと、歩み寄ってくる。

いつか来るかもしれないと心の準備をしていたが、実際にこうなると……看護師の言葉は理解する前に反対の耳から抜けていく、何も耳には入ってこなかった……。

——そして、二年の月日が流れた。

三歳になる修斗と二人で由佳の墓前に立っていた。

手を合わせると、たわしで墓石を綺麗に磨き上げ、綺麗な水で洗
い流す。そしてカスミソウと線香を手向けた。

墓石に填められたロケットを開くと、生前の由佳の安らかな笑顔
が見る事が出来る。

「ママ、バイバイ」

修斗は、ロケットに無邪気なキスをすると、隆生の手を掴んだ。

「じゃあな。由佳」

そう言つて、近所にある自宅まで歩いて帰っていると、古びれた
駄菓子屋の前に黒いガチャガチャを発見した。

全面黒く塗られ、中也全く見えない不気味なガチャガチャ。

隆生は、大して興味が無かったが、修斗は隆生の手を離し謎の黒
いガチャガチャの許へ走つていった。

「おい、修斗」

「パパ、ガチャガチャだよお」

「ダメだぞ修斗」

数ヶ月前に、ガチャガチャでヒーロー物のフィギュアを当てた日
から、修斗はガチャガチャの虜になっていた。

初めは、可愛い修斗に何度もガチャガチャをさせていたが、我慢
を覚えさせることも大切だと思い、最近はあるて小銭を渡さないよ
うにしているのだ。

「パパ、一回、一回だけ」

「ダメだ、帰るぞ」

不貞腐れ、頬を膨らませる修斗の手を引っ張ると、晩御飯の食材
を買ったためにスーパーマーケットに寄った。

翌日、修斗を幼稚園に預けると隆生は会社へ向かった。

いつもの様に電車で揺られ、人混みに押されながら出社する。そして、仕事が終われば急いで修斗を迎えに行く。そんな日々の繰り返しだ。

隆生が幼稚園に到着すると、既に修斗の姿は見えなかった。門前で中の様子を伺っていると、修斗の担任の先生が歩み寄ってきた。

「修斗君のお父さん」

「こんばんわ。あの、修斗は？」

「今日はお婆ちゃんが迎えに来られましたが」

「お袋が？」

「はい」

「解りました。ありがとうございます」

隆生は、心配事があつたのだ。

隆生の母は、孫に対して甘すぎるのだ。どこの孫を持つ両親もそうかも知れないが、オモチャにお菓子、修斗が欲しい物は何でも買ってやるのだ。

母が居ない寂しさを察しての行為だとしても、少々度が過ぎると思う事がある。

集斗には、わがままな子供には育って欲しくない。きつと由佳も同じ事を思うだろう。

その頃、修斗は、隆生の母が運転する車の中で、後部座席に山の様に積まれたオモチャを早く開けたい衝動に駆られていた。

初めて手にした持ち運びゲーム機で遊んでいると、車の前方に駄菓子屋と、黒いガチャガチャを見つけ、祖母に止まるよう頼んだ。

「ばあば。あれやりたい」

「何？ 集斗」

車が、駄菓子屋の前で停車し、無我夢中で集斗がガチャガチャの前へと向かう。

全面黒塗りのガチャガチャ。

集斗の祖母が、目の前の不気味なガチャガチャに嫌悪感を抱きながらも、大切な孫の為だと財布を取り出した。

「気味が悪いねえ。ちゃんとした物が入ってるのかい？」

集斗は、色々な角度から中の様子を伺おうとしたが、全てが真っ黒で何も見る事が出来ない。

「ねえ、ばあば。早くう」

「はいはい、ちょっと待ってね」

そう言つて、取り出した百円玉を掴み取ると、集斗はお金の投入口に百円玉を押し込みレバーを廻した。

プラスチックの乾いた衝突音が鳴り、吐出し口から黒いカプセルが現れた。

「ちよつと母さん。コレ買い過ぎだつて」

自宅に運び込まれた大量のオモチャの箱に怒りを露にする隆生の横で、嬉しそうに、包装紙を一心不乱に破り捨てる集斗。

「良いじゃないの。それよりもアンタ。ちゃんとこの先の事考えるの？」

「考えてるって何を？」

リビングのテーブル席に座る隆生の母につられ隆生が向かい側に座る。

「いつまで、集斗を一人にさせておくつもり？ 幼稚園も最終まで居残りさせて。再婚とかあ……考えないの？ 今のあの子なら、まだ間に合うと思うわ」

そう言いながら、隆生の母は心配そうな視線を、無邪気にオモチャを振り回す修斗に向けた。

何も言えずに俯く隆生を見て、母が大きな溜息をついた。

「今のあの子に必要なのは母親よ。そりゃ……由佳ちゃんの事を引きずっている気持ちもわか「引きずってなんかいない!!」「」

その言葉だけは、今の隆生にとっては我慢の出来ない言葉だった。凶星だったか、いつまでも過去の事を引きずるような女々しい男とは思われたくないという、変なプライドがあったからかも知れない。

「ただ……由佳の事を裏切ってしまうような。母親の記憶や思い出が無い修斗が、後に母親だと信じていた相手が再婚相手だと知った時、どうなのか？ とか……。でも母さんの言う通り、母親は必要だ。だけど、まだ気持ちの整理がつかないんだ」

「もう二年よ。あと何年待てば気持ちに整理が付くの？ その時にあの子はいたい幾つ？」

隆生の母の気持ちも分かってはいた。今の修斗なら、再婚相手の事を純粋な母だと認識しやすい。だが時間が経つに連れ、そうは行かなくなってくる。

それを母は心配しているのだろう。

リビングの隅にある、ゴミ箱に捨てられている黒いカプセルの蓋が怪しく光っていた。

次の日は休日だったが、会社からの急な呼び出しがあり、修斗を家に残して隆生は会社に居た。

どうやら契約先の企業とのトラブルがあったみたいで、今後の対応などを決める会議が続いていた。

日も暮れ、隆生は急ぎ足でコンビニで弁当を二人分購入し、家に帰った。

鍵を開け、いつものように「ただいま」と修斗に告げる。

「おかえりなさい」「おかえり」

二人からの返事が聞こえた。

「また来てるのか母さん」と言いながら扉を開けると隆生は目を疑

った。

修斗と一緒にオモチャで遊んでいる……由佳がそこに居たのだ。

これは幻覚なのか？ 夢なのか？ わけが解らずその場で硬直する隆生にエプロン姿の由佳が優しい笑顔を見せる。

「何、ボケつと立ってるの？ ご飯出来てるよ」

そう言いながらリビングのテーブルの上にお皿を並べていく由佳を、目で追う隆生。

「冗談だろ？ 幽霊？」

常識では考えられない事が起きている。

死んだはずの由佳が目の前にいる訳がない。

脳内が完全にパニックを起こし、全く動けなくなってしまった隆生を尻目に、修斗があどけない笑顔で、由佳に対し「ママ」と言いながら歩み寄っていく。

「ねえ、早く座って」

そう言つて、スーツ姿の隆生の肩に両手を乗せてリビングの椅子まで押してゆく由佳に対して、隆生は終始脅えた様子だった。

テーブルには、由佳の得意なクリームシチューが花柄のお皿に盛られており、カスミソウがガラスの花瓶に生けてある。由佳の墓にカスミソウを手向けたのも、由佳が大好きな花だからだ。

その向かい側で、シチューにパンを浸し、集斗の口に入れてあげる嬉しそうな由佳。

——幻覚とかでは無く、実態がある……。

隆生は、信じられない光景を必死で冷静に分析しようと試みる。

由佳が、スプーンでシチューを掬い、口に運ぶ。

これが夢でなければ何なのか？

「何ぼーっとしてるの？ シチューが冷めちゃうよ」と言われ、隆生は、言われるがままにシチューをスプーンで掬い、震える手で口に流し込んだ。

甘い中にもコクがあり、大きくカットしたジャガイモと鳥肉はモモ肉のカット。たまねぎも隆生好みのぶつ切りにブロッコリーが入っている。

その味、匂いが、隆生の脳内に眠っていた記憶を呼び覚まし、目の前の由佳の存在が強固になっていった。

「どう？」

「う、うまい。うまいよ」

隆生は、一心不乱にクリームシチューを食べた。一口一口を噛み締める毎に、スープが喉を通る毎に、由佳との思い出が溢れ出し、疑惑や不信感が薄れていく。

目の前には由佳がいる。

そう思えるようになってきた。何故かは解らない。だが、解ろうとする必要は無くたって良い。

隆生は、由佳と結婚して、修斗を含めて、初めて三人で食卓を囲む、描いていた夢に浸っていった。

集斗を寝かしつけ、隆生と由佳はビールを飲みながらテレビを見ていた。

時折まだ、目の前の由佳は何なのか？ と隆生は思う事があった。

テレビを見ながら無邪気に笑う彼女は生き返ったのか？

そんなありえない事を想像するしかなかった。

でも、仮にそうだとしたら、目の前の由佳は覚えているのだろうか？

ガンで死んでしまった事を。また、今の自分は墓に入って二年も経って現れた事もだ。

これだけは、間違いない真実なのだから。

その後、二人は体を重ね、お互いの温もりを確かめ合った。

由佳の濡れた唇、暖かい肌に触れ、彼女が生きている事を確信し

た。

シングルベッドの上で指を絡め、鼓動を感じながら……。

次の日、隆生が目を覚ますと、ベッドには自分一人だけだった。時計を見た。

——「11:12」——

起き上がり、五畳程の部屋を見渡すが由佳の姿は無かった。夢だったのか？

「俺、夢……見てたのかなあ」

隆生が寝室のある二階から一階のリビングに降りてくると、由佳が、スーパールの袋を両手に持ち、玄関から修斗と帰ってきた所だった。

隆生の姿を見て、由佳が笑顔で声を掛けてきた。

「おはよう。冷蔵庫の中、何も無いから色々買ってきた」

その時、隆生は心でどこかに眠っていた疑惑や不安が一気に溢れ、口に出てしまった。

「バカッ！！勝手に外へ出るなよ。お前はッ……」

そこで踏み止まった。

『お前は死んでいたんだぞ』など言える訳が無かった。その結果、目の前の由佳が傷つく姿など見たくなかったのだ。

「何？」と訊ねる由佳。

「とにかく、外へ出るんじゃない。食材も俺が会社の帰りに買っし、家でじっとしていてくれ」

近所の隣人や、スーパールの店員の親しい人は、由佳が亡くなった事を知っている。そこへ元気な由佳が現れでもしたらどんな事になるか？

考えるだけでも恐ろしい。

「その代わりと言っちゃなんだが、三人でディズニールランドでも行

「うっ」

隆生の提案に由佳も修斗も大喜びした。

デイズニーランドに着くと、キャラメルポップコーンの入ったカップを修斗が首から下げ、色々なアトラクションに三人で乗った。長い列に並び、前へと進むと、係員に「何名様ですか？」と聞かれ、隆生は咄嗟に出た二本の指に驚き三本にした。

二人だと言う事に慣れてしまっていたからだ、そんな失敗も今の隆生にとっては幸せだった。

これが家族なのだから。

そしてシンデレラ城の前で笑顔で記念撮影をした。

だが、満面の笑顔で撮ったこの写真が、最後の写真になるとは、この時の隆生には知る由も無かった。

後編へ続く

第1話「おかえり」後編

それから隆生は、由佳の僅かな異変、不気味な行動に気付くようになって行くのだった。

まず、隆生が感じたのは、家の中で由佳の姿が見えなくなったと思うと、人目に付きにくい和室の隅で誰かと話しをしているのだ。

隆生が声を掛け扉を開けると、由佳は何も無かったかのように、無言で部屋を後にする。

今度は、夜中に由佳がベッドから出て行くので、隆生がそつとりピングまで覗きに行くと、包丁で手首を切っているのだ。

ポタポタと垂れる血を虚ろな瞳でじつと見つめているだけで、隆生が慌てて手当をした。だが、隆生が会社から修斗を連れて帰宅すると、手首に包帯を巻きテレビを見ているのだ。

次第に、家のなかでも物思いに更けた様子で、部屋に閉じ籠る事が増えた。

そんな姿が心配に思えた隆生は、病院に連れて行くこうにも戸籍が無いため、保険証も発行できずに困り果てていた。

精神的な病気なのか？ 何かは解らない。

隆生が、ゴミ袋に家中のゴミを集めていると、リビングの隅にあるゴミ箱の中から黒いカプセルを見つけた。

そして丸いカプセルの半分を取り出し、観察していると、更にもう半分がゴミの中から現れた。

それは間違いなく、集斗が気になっていた黒いガチャガチャの力プセルだろう。

一体何が入っていたのか？

隆生がカプセルの蓋の内側を見ると一枚の紙が貼り付いていた。黒い三センチ四方の正方形の紙。

その紙を取り、裏返すと白い文字で『母』と書かれていた。

「何だコレ？」

ゴミ箱の中を見たが、紙以外には何も無かった。玩具だけ抜き取り残りを捨てたのか？

それを確かめに、集斗の許へと向かった。

リビングのソファで携帯型のゲームで遊んでいる修斗に黒いカプセルと紙を見せた。

「なあ、修斗。これ、知ってるか？」

すると、修斗はゲームの画面から目を離さずに答えた。

「うん。ばあちゃんがお金をくれたんだ」

「やつぱり」と隆生は小さく呟いた。

「他に何か入ってたのか？」

修斗は首だけを左右に振り「それだけだよ」と答えた。

隆生はこの黒いカプセルが気になって仕方が無かった。

『母』と書かれた謎の紙の事も何か引っかかる。

隆生は、会社の休憩時間に、デスクの上に開いていたパソコンで、『黒いガチャガチャ』について、検索して見た。

そこで、隆生がずっと抱いていた疑惑を解く鍵が見つかったのである。

とあるサイトで黒いガチャガチャに関しての目撃情報や、それを引きいた者の体験談などが書き綴られていたのだ。

ある人は『死』と言う紙を引き殺されそうになったり殺されていたり、ある人は『金』と引き大金持ちになった。また、ある人は『無』を引き何も起こらなかったり、『求愛』と言う紙を引いてそれまでモテた事が無い人が嘘のように異性から支持されるようになったりと、この黒いガチャガチャの持つ不思議な力で人生が大きく変わった人間が、多くは無いが実際に存在している。

もしそんな力がこの世に存在し、修斗が引いた黒いガチャガチャがそうであれば、『母』と書かれていた紙が存在している事を考慮

すると、由佳が戻ってきたのも不思議ではない。

隆生は次の休みの日に、一人で由佳の墓に行った。

幾ら由佳が戻ってきたと言っても、墓だけは綺麗にしておきたかった。

掃除が終わり、カスミソウと線香を手向け手を合わせる。

そこで、隆生は自分の取った行動に反吐へが出た。

「由佳が戻ってきているのに、手合わせて何になるんだよ」

だが、同時に気になる事もあった。

由佳を埋葬したのなら骨はどうなっているのか？

無くなっているのか？

お寺の住職に相談し、骨壺の中身を確認した。

骨は……………。

……………。

有った！？

と言う事は、今の由佳には骨がない事になる。でもそんなはずは無い。

肉体と同時に骨まで甦ったとも言うのか。

だが、近頃の怪しい行動を考えると、今の由佳は本当の由佳なのか？

疑惑の念がどんどん隆生の中で膨らんで行った。

そして、一気に不安が押し寄せた。

もし由佳が由佳でないのなら……包丁、血。

修斗が危ない。

直感だがそう思い慌てて家に戻った。

集斗は、今日もゲームに夢中だった。

幼稚園でも周りの友達が皆持つている為、ずっと欲しいと思い続けていたのだ。

画面の中のお気に入りのキャラクターが相手のモンスターと戦う。

「あ、負けちゃった」

ゲーム内の文字には「シュウトは死んでしまった」と現れたが、集斗は「死ぬ」と言う意味が分からなかった。

だが、画面の中で自分の名前が付いたキャラクターが倒れ、動かなくなってしまった所を見ると、起き上がる事は無く、このキャラクターの歩む道はココで終わりなんだと分かった。

家に戻ると、日も暮れ薄暗い中、由佳一人がソファに座って本を呼んでいた。

荒い呼吸で隆生が修斗の行方を訊ねる。

「修斗は？」

「上の階で寝てるわ」と由佳が返す。

修斗が居ない事を確認し、隆生は疑惑の念を一気にぶつけた。

「お前は一体何者なんだ？」

その途端に由佳が黙り込む。

「私は……私よ」

神妙な面持ちで答える由佳に更に追求する隆生。

「だけど、お前の近頃の様子はあまりに不気味だ。お前が……怖いんだよ」

すると由佳はゆっくり口を開いた。

「私が甦ったから？」

その言葉に隆生の口が止まった。

「知って……いたのか？」

由佳は、暗い表情で立ち上がり隆生のパソコンデスクの引き出しを開けると、コピー用紙の束とカプセルを取り出しテーブルに置い

た。

それは、隆生が黒いガチャガチャに関して調べていた事と、修斗が引いたガチャガチャだった。

言葉を失う隆生。

「私が死んだ時の事も覚えているわ。甦った時の事も」

「何だつて？」

「初めは何が起きたのか解らなかった。気が付いたら自分のお墓の前にいたの。記憶を頼りに貴方の家を見つけ、大きくなった修斗に出会った。でも……」

途端に由佳の目から涙が溢れ出した。

「自分は一度死んだ人間。火葬もされたのなら、今の私は何なのか？ 解らなくなつて怖くなつて。自分の腕を包丁で切つて生きている事を確かめようとした」

「だから……」

隆生の中で、謎の行動の真相が判明した。

「変装して自分のお墓に行き、自分の骨壺を見たわ。私は一体何なの？ 私は誰なのッ！？」

隆生はどう言葉を掛けて良いのか解らず立つて聞いているしかなかった。

「そんな時、貴方のデスクからこの紙を見つけた。私がどうやって甦ったのが分かったわ」

そして、隆生の前に新たな黒いカプセルを出した。

「それは……」

「私なりに色々調べたの。そして黒いガチャガチャを見つけたわ。コレを貴方が開けてくれれば、前の効果が書き換えられ私は消える。その方が良いの。命は、その流れに逆らつてはダメなの」

由佳の気持ちや苦しみも理解できたが、一つだけ、勘違いしている事がある。

「お前を甦らせたのは俺じゃない。修斗なんだ」

「修斗が！？」

「母親を必要としたからこそ、お前を引き当てたのかも知れない。アイツの為だ、消えるなんて言うなよ」

「勝手な事言わないでよッ！！　今まで私を疑っていた癖に！！」
その時、家の外で車が人を撥ねるような音が聞こえた。

会話の途中だったが、隆生はその様子を見に、その場を去った。

家の前で、ワンボックスカーに跳ね飛ばされ血まみれになっている子供が、電柱の前でぐったりとしている。

運転手が慌てて降りてきて子供の意識を確認するが、反応が無い。

「いきなり、この家から子供が飛び出して来たんだ」

「何だつて!？」

隆生の家を指差し答える運転手。

恐る恐る血まみれの子供に近づくと、それは紛れもなく修斗だった。

「修斗おおおッ!!」

慌てて抱き上げながら、運転手の男に直ぐに救急車を呼ぶように伝える。その騒動を聞きつけ、由佳が走って出てきた。

「修斗ッ!!　どうして!？」

その後、修斗は救急車に運ばれ病院で緊急治療室に運ばれた。

修斗の無事を祈る中、隆生は自分の母親にも電話で連絡をした。

「母さん、修斗が車に轢ひかれた。今、東宮大病院で緊急手術中なんだ」

「何だつて!？」と隆生の母親の驚く声が聞こえた。

「私も、今からそっちに向かうわ」

「わかった。あと、母さん、修斗に黒いガチャガチャをさせただろ？」

隆生はそんな状況ではなかったが、一応確認してみた。

電話越しに隆生の母親は、病院へ出かける準備をしながら答えた。

「ああ、何とも不気味な玩具さ。詐欺もいい所。私も修斗もただの紙切れが出ただけよ」

その言葉を聞いて、隆生は何か引かなかった。

「母さんも引いたのか？」

「何かよく分からなかったけど『母』と出たわ」

更に隆生が混乱する。

『母』を出したのは修斗では無かったのか？

「じゃあ母さん。修斗は何を引いたんだ？」

次の言葉を聞いて隆生は愕然とした。

「不吉よ、まだあの子がその意味を知らなくて良かったけど……『死』と書いてあったわ。不気味ね、今回の事故と関係してなければいいけど。それじゃ切るわね」

隆生の表情を伺う由佳の前で、携帯電話を握り締めたまま頭の中で情報を整理する。

「お母さん、何て言ってたの？」

「由佳を甦らせたのは修斗じゃない。母さんだったんだ」

「えっ!？」

「そして、修斗が引いたのは『死』だ……」

由佳は口に手をあて、流石にショックを隠せなかった。

「じゃあ、あの子は……」

「でも、ガチャガチャをしてから時間が経ち過ぎだろ？ 何日も過ぎてるぞ」

「きつと集斗は、『死』と言う意味を知らなかったのよ」

「じゃあ、もしかしたら今日知ったかも知れないって事なのか？」

隆生は何もして上げられない悔しさで、歯を食いしばり拳を血が出る程に握った。

由佳は、カバンから黒いカプセルを取り出し開こうとした。が、隆生が制止した。

「おい、何を感じてる？」

「こうするしか無いじゃない！！ 集斗を救う為なの」

「だけど、そう都合の良いものが出るとも限らないだろ」

「だったらこのまま指を咬えてあの子が死ぬのを待ってろって言うの？」

暫く沈黙が続いた後、隆生は由佳の手から黒いカプセルを取り上げた。

その時、手術室から医者が現れ、現在の状況を伝え始めた。

「お子さんは、極めて厳しい状態です。心臓が破裂し、輸血をしながら縫合をしているのですが…… 最善を尽くします」

「最善を尽くすって助かるんですか！？」

必死に喰らいつく隆生と由佳。

「心臓移植が最善の手立てですが……、今の手術に賭けるしかありません」

医者はそう言う足早に手術室に戻って行った。

それは『覚悟をしておけ』とでも言いに来たのか？

「俺が開ける」そう言ってカプセルを開けようとしたが、今度は由佳が取り上げた。

「やっぱり私が開ける。もしダメだったら、私の心臓を修斗に移植して」

由佳は、隆生の制止を無視し、意を決してカプセルをこじ開けた。

それから三週間が過ぎた。

隆生は、無事退院した修斗の手を引きながら自宅へと帰った。

そこに由佳の姿は無い。

由佳が引いた紙に書かれていた言葉は「犠牲」だった。その文字を確認すると、由佳は苦しそうに倒れ、隆生に「ありがとう」と言い残し息を引き取った。

そして、普通なら厳しい審査の末にドナー登録と、手順が必要だが、全てをスルーし、その場で修斗の心臓と入れ替えられたのだ。医者達は、黒いガチャガチャが持つ魔力のせいなのか？ 何の疑いも躊躇いもなく、心臓移植を行った。

集斗に決められた死の運命を、由佳が自己犠牲と言う形で救ったのだ。

今思えば、あそこで全く関係のない効果を引く事だって十分考えられた。だが、修斗を助けたいと言う強い思いが、カプセルの中に届いていたのかも知れない。

また、由佳にとつては、一番望んでいた『この世の去り方』なのかも知れない。

ガンとの闘病期間中、由佳は修斗に大して何もして上げられなく悔しいと言っていた。

だからこそ、自分の命の流れを通常に戻し、その代わりに修斗を救えた事は本望だったはず。

例え勝手な解釈であっても、そう思いたかった。

それから数日後、隆生は別の部屋で由佳が寝るために引いていた布団を直そうと、敷布団を捲めくった。

するとそこに、布団一枚で調度隠れるように、DVDが何枚も敷き詰められていた。

一番右端のディスクには「一番最初に見てね」と書いてあり、他のディスクには「修斗の幼稚園卒園のお祝い」「小学校入学のお祝い」「小学校卒業のお祝い」から、社会に出て結婚するまでのディスク、隆生に宛てたディスクも準備されていた。

これを一人で撮ったのか？

最初のディスクを再生した。

そこには和室の隅でハンディムービーカメラで自分を撮影している由佳が映っていた。

「隆生」と言つてニコやかに手を振る。

「この間、デイズニールンド楽しかったよ。そこで写真を撮つてもらつて思ったの。私はもしかしたら、また消えてしまうのかも知れない。だから、今の内に何かを残せたらと……。生き返つて思ったの、私は修斗にも貴方にも何もして上げれず、何も残せずに死んでしまった。だから、今度こそ後悔しないようにしようつて。これから、色んな時を想定して沢山の映像と言葉を残すから、私の言葉を修斗にも聞かせて上げてね。約束だよ」

その時に、隆生自身が足音を立てて和室に近づき「おい、入るぞ」と言つて扉を開ける。そして、慌てて由佳が隠していた。

隆生が不審に思つていた行動の答えがこの映像を残す為だった事に気付き、疑つていた自分自身に激しい憤りを感じ、同時に由佳に申し訳なく思った。

そして、隆生は沢山のディスクに向かって誓つた。

「大丈夫。俺達は、いつまでも夫婦だ」

第一話 終わり

第2話「好きです」前編（前書き）

お待たせしました！！

と言うか、待っていてくれただろうか？

やっと2話が完成しました。

今回もクソ真面目な物語ですが、何とか形にできたと思います。

単なる恋愛物ではなく、そこに黒いガチャガチャが融合し、不気味な印象に仕上げ、虐めの問題などを通じ、主人公の心の成長や葛藤なども織り交ぜてみました。

1話の評判が良かっただけに、かなりハードルが上がって苦しんでしまいましたが、今回も良い感じの評価が頂ければ書いた甲斐があるかなと思います。

勿論批評や、駄目だし、誤字。脱字は矛盾の指摘は喜んで受け付けていますので、遠慮なくお願いします。

第2話「好きです」前編

大地を叩きつける程の激しい雨の中、鈴谷^{すずや} 優菜^{ゆうな}はビニール傘を差し走っていた。

傘を持つ反対の手には、コンビニで買ったパンと水。

これ程の雨になると傘で防げるのは腰位までで、制服のスカートは重みを増し、靴の中はアスファルトを踏みしめる毎に不快な冷たさに満たされていた。

慎重に歩けばここまで濡れる事は無いが、今の優菜にはどうしても急がなければならない事情があったのだ。

それは、小さな公園に捨てられている犬の事が心配だと言う事。

数日前から、公園の茂みの中で鳴いているのを発見した優菜。

ベンチの後ろの茂みに、目立つ様に置かれたダンボール箱から黒く小さな鼻を突き出し、くんくんと鳴いているのだ。

高校への通学途中に見え、覗き込んだ優菜は、愛くるしいミニチュアダックスフンドの子犬に心を奪われた。オス犬だった。

だが、よく見てみると、片目は半開きで時折ブタの鳴き声のような音が鼻から鳴っている。恐らく、何かしらの障害を持って生まれたきたのだろう。

だからなのか？ 子供が生まれたが飼えないなどの理由で、捨ててくれる事を期待し、捨てられたのかも知れない。

公園を通り過ぎる度に声を掛けていた優菜は、次の飼い主に拾われる事を願いながら、飢えに苦しまないように食事を与え続けていた。

誰にも見向きもされず、寂しそうに鳴き続ける犬と、ある事情を抱えている優菜の心境がリンクしている様に感じ、放って置けなかった。

勿論、優菜自身が飼おうとも考えたが、優菜の暮らすアパートはペット飼育が禁止の上、母子家庭でもあり、自分と母親だけでもギリギリの生活を送っているのだ。

そんな事情を抱えながら、今日も優菜は雨の中走っていた。

アスファルトに溜まった水溜りを弾きながらコンビニの角を曲がり、レンタルビデオ店の前を通り過ぎるとあの公園がある。

そして、公園に到着した優菜は、目の前の光景に息を呑んだ。

Π α ν δ ρ ? ρ α — パンドラ — 第2話「好きです」

結局今年もバレンタインデーにチョコを渡せずに終わってしまった。

優菜は、学校からの帰り道に、いつも思いを馳せている男子生徒の事を思いながら後悔の溜息をついていた。

バスケットボール部のキャプテンでもある黒川くろかわ 啓次けいじは、他の女子にも人気の高いイケメンだ。

整髪料で立たせた髪にキリッとした目鼻立ち、父親がアメリカ人と言う事もあり、ハーフ顔な為、クラスでも他の男子と比べて浮いてしまう程に輝いている。

他の女子は、黒川の外見にのぼせているが、優菜だけは違った。勿論、ルックスも少なからずは影響はしているが、それだけではこれ程までに恋焦がれない。

いつもは、血気盛んな『ちょい悪』と言った感じの黒川だが、それとは真逆な程に、優しい一面を見る事が出来たからである。

雨の中、誰も見向きもしないダンボールの中で鳴いていたミニチュアダックスフンドの子犬を抱き抱え、首に掛けていた部活用のタオルで体を拭いてやっていた。

あの時の、子犬を持ち上げ、抱き抱えた時の美しく純粋な横顔を見た時、優菜の心臓が大きく脈を打ち顔が熱くなった。

そして、パンと水を持っていた優菜は、黒川に見つかり手招きされた。

その後、これまでの経緯^{いきわづ}などを話し、優菜の事情を理解してくれた黒川は、自分の家で飼うと引き取ってくれたのだ。

「そっぴゃ、名前は？」

「えっ？ そう言えばまだ何も……」

「そっか、何が良い？」

「えっと……、明るくて、暖かい名前が良いな」

「明るくて暖かい名前か……。そうだな、こんなどしや降りの雨を掻き消すくらいの太陽みたいになって欲しいつつう意味で、『サン』ってどうだ？」

「それ良い。よろしくね、サン」

サンは、改めて挨拶するように鼻を鳴らした。

この時が、優菜自身、初めて男子と挨拶以外で会話をした時でもある、人生初の恋をした瞬間でもあった。

特に優菜は人見知りが激しく、常に女子としか話そうとしないからだ。

次の日、学校に着くと、クラスでは女子が固まりを作り「誰に渡した」とか、「どうだった？」などの恋の話が咲いていた。

優菜は、窓際の真ん中の席に座ると、まだ登校していない黒川の席をチラッと見た。

「アンタも渡したの？ 私の啓次に」

そう言って、優菜に鋭い目つきで睨み付ける下畑しもはた 京子きょうじも、黒川にゾッコンだ。

京子の黒川へのアプローチは凄まじく、クラスの女子を全員支配下にしてまで、席替えでは黒川の隣を常にキープし続け、ワザとブラウスのボタンを豊満なバストの際まで広げ、超ミニスカートは、黒川の隣で足を組めばお尻が見えてしまうくらい、色仕掛けを武器としている。

噂によると、夜はキャバクラで歳を誤魔化して働いているらしい。だからなのか？ いつも香水の匂いがする。

ちなみに、京子は「私の啓次」と言っているが完全なる思い込みであり、黒川はそう呼ばれている事を知らない。

そんな京子は、私が黒川に密かな思いを寄せている事を見抜き、気に入らないのだ。

優菜は、チョコレートを渡せなかった事を思い出し、下を向いてしまった。

勿論、優菜もチョコレートを準備し、黒川に渡そうと機会を伺ってはいたが、他の女子同様、京子やその仲間達の防衛線が凄まじいだけに、こっそりと渡す事も出来なかったのだ。

その様子に卑しい笑みを見せる京子。

「ああ、そう。やっぱりアンタみたいな影の薄い娘には不釣り合いよね。少しは自覚したんだ」

そう言いながら、優菜の腕を服の上から捻ひねり、憎しみを込める。

だが、優菜は微動だにせずに俯いたままだ。

優菜の腕や太ももには沢山のアザがある。

そして、今日も、そのアザが増える原因である儀式が行われた。

優菜のしっとりとした肩口までの髪を、京子とその仲間五人に鷲掴みにされながらトイレに連れて行かれ、殴る蹴るの暴行を加えら

れる。

「キモイんだよ」「死ねよ」「生きてる価値ねえんだよ」「このオタクッ」「こっち向くんじゃねえよ」

彼女達は、決して顔や人目につく所は殴らない。

一度、先生に注意された事があるからだ。

その当時から一番酷かった。

トイレで羽交い絞めにされ、工作室にあった桐きりで、泣き叫ぶ優菜の耳を貫通させた。悶絶する優菜を見下ろし大爆笑する京子達。そこへ、熟年の女教師が入って来た。

教師は、虐めの現場と優菜の耳から流れる血、京子達をじつと見ると、「程々にしておかないと退学よ」とだけ言って用を済ませ出て行った。

助けを請う視線を向けていた優菜はこの時ほど、教師を信用できないと思った事は無い。

靴の中や、イスに画鋲がびようは当たり前、髪にボンドを垂らされた事や、『針治療』と題され裁縫道具箱の縫い針を頭に刺された事もある。

制服を無理やり脱がされ全裸にされ、ラグビー部の男子がいる部屋に放り込まれた事だつてあつた。幸い、近くにいた女の子のマネージャーが服を掛けてくれて事無きを得たが、もしマネージャーが居なかったと思うとゾツとする。

そんな経験に比べれば、今の様にトイレで殴られる方が耐えやすかった。

勿論、母親に言える訳は無い。

ただでさえ大変な生活なのに、余計な心配はかけなくなかったのだ。

誰にも助けられず、毎日鳴いていたミニチュアダックスフンドの子犬に自分の境遇を重ねていただけに、黒川に助けられた事が自分のように嬉しかった。そこも彼に恋をした理由でもあつた。

すると、あの黒川が女子トイレに入ってきた。驚く一同の手が止まる。

黒川は、一通り状況を確認すると、怒りに満ちた表情で洗面台横のタイルを殴りつけた。

「デメエら、止めようや……こんな汚ねえ事」

黒川の非難の眼差しに必死に釈明をしようとする京子。

「違うの啓次。私は鈴谷さんを助けようとして……」

その言葉に一瞬驚いた京子の仲間達は、空気を読み「そうよ、コイツは鈴谷を助けようとしただけ」と便宜をはかった。

だが、黒川は京子の言葉を遮り、優菜の細く白い手首を掴むと引き寄せた。

そして。

「付き合ってもいねえのに、馴れ馴れしい呼び方すんじゃねえ。もうコイツを虐めるなよ。次やったら許さねえから」

その言葉を残し、黒川は優菜を女子トイレから救出し屋上へと引き連れた。

なぜ、黒川が、優菜にそこまで加担するのか？

その理由が解らず、京子は豆鉄砲を喰らったような表情で呆然と立ち尽くしていた。

優菜は凄く嬉しかった。

さっきまで京子達に殴られていた体の痛みすら吹き飛ぶくらいに。

しっかりと握られた黒川の手だけが優菜の目に映っていた。

屋上の扉を開けて外へ出た二人。

黒川は優菜の手を離すと、フェンスにもたれた。

「いつからだ？」

「いつから？」

色んな事があり、若干混乱ぎみの今の優菜には、急な質問に答えれる程の余裕はなかった。

黒川は気を使って訊ねてみたが、優菜の状態を察し、ストレートに訊ね直した。

「いつからアイツらに虐められてんだ？」

途端に表情が曇る優菜。

「入学して、少ししてから……かな」

「もう二年以上じゃねえか」

「最近は何程酷くは無いけど、回数が増えた感じ」

優菜の言う、最近と言うのは、黒川への思いが発覚した時だ。だが、「そのせいで」とは言えなかった。

「そっか、今度アイツらに虐められたら俺に言え。守ってやつからよ」

「あ、ありがとう」

その言葉に優菜の顔が紅潮し、全身の筋肉が硬直したかに思えるほど、固まってしまった。

驚き、自分の気持ちを落ち着かせるため、優菜はサンの話しに話題を切替えた。

「さ、サンは元気にしてる？」

その質問に嬉しそうな笑顔を見せた黒川は、スマートフォンを取り出し一枚の写真を優菜に見せた。

それは、黒川が着ているバスケット部のユニフォームとそっくりな服を着せられ、黒川に頬ずりされている嬉しそうなサンの姿だった。

「わあ、可愛い」

相変わらず、片目が半開きのままなサンだが、その表情は穏やかで黒川に十分な愛情を注いで貰っているのが伺える。

「病院にも連れて行ったが、やっぱり産まれた時から障害があるんだってよ。イビキみたいなんも鼻の気道が狭いらしくてな」

「そっか、でも元氣そうで良かった」

「今日は部活もねえし、俺の家に遊びに来いよ。サンもきつと喜ぶ

はずだ」

「えっ、良いの？」

「良いつて、お前もサンに会いたいだろ？」

「うん」

いつしか笑顔を取り戻していた優菜。

そんな二人の楽しそうな会話を屋上の扉から息を凝らし覗いていた京子は唇を噛み締めた。

京子達は教室に戻ると、今後、如何にして優菜に制裁を下そうかと会議を始めていた。

すると、一人の女子が、「黒いガチャガチャって知ってる？」と皆に訊ねた。

「何ソレ？」と小馬鹿にして笑う京子。

「ウチの兄貴がさあ、サイトで知ったらしいんだけど、神出鬼没の黒いガチャガチャがあったら廻してみろって。金持ちになるかも知れないし、好きな相手と相思相愛になったりもするんだって。たまに良くない事も起こるみたいだけど。『強力な御呪い（おまじない）』みたいな感じかな」

「へえ、オモシロそうじゃん」

黒川が住む一軒屋から出てきた優菜。

玄関先で、黒川に抱かれ尻尾を振っているサンにお別れの挨拶をした。

「じゃあねサン」

手を振る優菜に黒川は「またいつでも来いよ」と笑顔で言った。

「うん、ありがとう。すっごく楽しかった」

そう言つと、優菜は、すっかり夜になってしまった道を歩き出した。

突き当たりの角を曲がると、聞きなれた不快な声が優菜の鼓膜を刺激した。

「すうずうや（鈴谷）さん」

そうふざけて呼んだのは京子達だった。

異様な雰囲気、優菜は後退りした。

「な、何？」

「ずいぶん楽しかった感じじゃない？　もしかして……もうやっちゃったとか？」

「そんなんじゃないよ」

慌てて否定した優菜の肩に京子は腕を廻した。

香水の匂いが鼻に付く。

優菜は京子とそのグループに連れられ街を歩いていた。

ガチャガチャの話をした女子が、彼氏とのデート中に見かけたところで、案内されていたのだ。

優菜が逃げられない様に、京子の仲間が囲いながら移動する。

商店街を抜け、人目の付かない路地裏を進む。

すると、目の前に一件の古い駄菓子屋を見つけた。

既にシャッターは閉まっており、薄暗い街灯が不気味に照らしている。

その軒下にある不気味な黒いガチャガチャを見つけ、京子達の足が速くなる。

「ホントにあるじゃん」と京子が鼻で笑った。

優菜は、それが一体何なのか？　何故京子達はこんなモノを捜し求めているのか理解できなかった。

全体がブラックカラーなガチャガチャで、中も何も見えない。だが、不思議な魅力を感じると同時に、『危険』だと本能的に察知

した。何故かは、優菜自身も分からない。

京子は、案内した友達の方へ振り返ると、最後に確認した。

「やっぱりガセネタじゃない？　これで何も起こらなかったら私タダの馬鹿じゃん」

「起こったら起こったで、起こらなかったら起こらなかったで良いんじゃない？」

その言葉を聞いて大きな溜息を付いた京子は、「まあ、いつか。どうせ百円だし」

そう言つて、ブランド物の長財布から百円玉を取り出すと、躊躇する事なく挿入口に押し入れた。

そして、レバーを捻る。

すると、カプセル排出口から、真っ黒なカプセルが乾いた衝撃音と共に吐き出された。

カプセルを取り出した京子は、「また真っ黒じゃん」と言い、カプセルをこじ開けた。

息を呑む仲間達。

中を確認する京子。

そして一枚の紙を取り出した。

黒い三センチ四方の紙に書かれたピンク色の文字を読み上げる。

「求愛つて書いてある。これで終わり？」

「きつとこれからよ」

期待に胸を膨らませる仲間の一人がそう言つと、他の仲間が優菜の背中を蹴つて、ガチャガチャの前に倒した。

「次はオメエの番」

「死んじやつたらお花飾つてあげるからね」「京子が良いのを引いたんだから次はきつと悪い事よ」

口々に優菜の不運を祈る京子の仲間達。

「早く、廻せよ」

そう急かされ優菜は言われるがままにスーパーで買った安物の財

布から百円玉を取り出し、困惑しながらもレバーを廻した。

カプセルが吐き出される。

「早く開けるよ」「何やってんだよキモオタク」

不気味な黒いカプセルを握り締めた優菜は、怖くて開ける事が出来なかった。

そんな優菜の姿に苛立ちを隠せない京子達。その中の一人が、優菜の髪を引っ張りながら「早く開けるつつつてんだろ」と急かした。

そこへ、巡回中の女性警官が自転車で駆け寄ってきた。

「やべえ」と声を漏らした京子の仲間。

「アンタ達、何やってるの？ 良い歳して弱い者虐めてるんじゃないよ。アナタはもう帰りなさい」

「はい」

優菜は、天からの救いだと思い、その場から走り去った。

結局、優菜は家に帰ってからも、カプセルを開ける事が出来ずに引き出しにしまった。

次の日。

優菜はいつも通りに学校に着き、教室の扉を開いた。が、目の前の光景に言葉を失った。

なんと、多くの生徒達がいる中、黒川の膝の上に座っている京子が、濃厚なキスをしているのだ。

しかも、至る所から京子を絶賛する男子達の甘い溜息が聞こえる。

「マジ良い女だぜ」「良いなあ黒川」「俺も付き合いてえ」「一発やらせてくれねえかな」「俺なんて相手にされないんだろうなあ」

あの黒川が何故、京子と親密な関係に急発展したのか？ 訳も分からず、動揺を隠せぬまま自分の席に着いた。

京子は、黒川の唇から自分の唇を離すと、キスをせがむ黒川を制止しながら優菜の方へ向いた。

そして、最高の優越感に浸った眼差しを向け、軽く笑って見せた。
どんな顔すれば良いのか解らず硬直する優菜の許へ、京子の仲間
が歩み寄る。

「まあ、そう言う事だから」

「てか、オメエ。カプセル開けたの？」

「いえ……」

放心状態で答える優菜の髪を引っ張る京子の仲間。

その姿を見ても、京子との熱い時間を楽しむ黒川は助けようとも
しない。と言うよりも優菜など視界に入っていないと言った感じだ。

昨日までの、あの優しい黒川はどこに行ってしまったのか？ ま
るで別人になってしまったかのように、黒川は京子を抱きしめる。

何とも言えない喪失感が優菜を襲う。

それは、間違いなく、黒川の存在は優菜の心の一部となっていた
証だった。

それが、途端に消えてしまった。ぽっかりと空いた心が痛む。

途端に悲しくなり、切なくなり、苦しくなり、優菜の目から大粒
の涙が零れた。

その日のトイレでの儀式は、何時も以上に激しかった。

まるで優菜の心に追い討ちを掛けるかのように……。

黒川も、誰も助けに来ることも無く……。

ずっと……。

後編へつづく

第2話「好きです」後編

優菜は、京子の仲間に仕打ちを受けた体の痛みには耐えながら家路に着いていた。

今も尚、黒川の豹変した姿が優菜の目に浮かんでいた。

大きな喪失感と、京子への嫉妬が湧き上がる。

何故なのか？ そう考えても直接的な理由は考えられなかった。

唯一考えられるとすれば……あのガチャガチャのカプセル。

だが、そんな馬鹿げた話しが実在する訳が無い。そう優菜は思っていた。

築年数の古いアパートに帰ると、真っ暗な室内の照明を点け自室に向かう。

本棚に漫画が敷き詰められている部屋に入ると、カバンを机の脇に置き、真っ先に引き出しから黒いカプセルを取り出した。

そして、手の中で丸い球体を転がし考察を始めた。

外観を見ながら、昨日の出来事を思い浮かべる。

やはり、黒川の変わり様はガチャガチャの持つ不思議な効力なのか？ 仮にもし、そんな物があつたとすれば京子達在必死になって捜していた理由が分からなくもない。

京子がガチャガチャをする理由など、普通であれば無いのだから。

手の上のカプセルには強力な「恋の御呪い」があり、その効力のお陰で黒川は京子のモノとなった。

そう考えるのが一番簡単だった。

「だったら私もこのカプセルを開ければ黒川君に好きになって貰えるのかな？」

何時しかぼんやりをカプセルを眺めながら物思いに更ける。その内に、無意識の内に両手がカプセルを強く握り始めた。

ゆっくりと左右に引つ張る。

その時。

玄関の鉄扉のドアが開き、慌ててカプセルをスカートのポケットに仕舞い込んだ。

「ただいまあ。今日もスーパーの弁当で良いでしょ」

と、会社から帰ってきた優菜の母がスーパーの袋をぶら下げて帰ってきた。

優菜の母は、荷物をリビングテーブルの上に置き、マフラーを緩めると、自室で椅子に座っている優菜の何時もと違う雰囲気を感じ取った。

「アンタどうしたの？ 何か学校であつた？」

そう言つて顔を覗き込もうとしたが、優菜はその場から逃げるように家を飛び出した。

自分の悩みなど、母に伝えてどうこうなる物でもない。

特にデリケートな悩みでもある。

宛ても無く夜道を疾走する。

だが、気付けばそこはサンと出会い、黒川に恋をした公園だった。

雨の中、ここで話しをしていた時が、一番幸せだったと思い返しベンチに腰を預けた。

再び、ポケットからカプセルを取り出した優菜は、大きく深呼吸をした。

もしかしたら、これで変わるかもしれないと期待を込める。

できる事ならもう一度、いや、これからもずっと黒川に見つめて欲しい。話しがしたい。

そう思い、優菜はカプセルを開けようとした。

「そのカプセルを開けるなッ」

男の声が聞こえ、優菜の手がまたも止まった。

振り返る優菜の目の前に、一人の男が立っていた。

地味な黒いロングコートを着た二十代の男。

優菜は、変質者かと思いその場から逃げようとしたが、一つ引つかかる事があった。

それは『カプセル』の事を知っていると云う事だ。

優菜は恐る恐る訊ねてみた。

「このカプセルの事知ってるんですか？」

「ああ、勿論だ」と男は抑揚の無い返事をした。

冷たい人間なのかとも優菜は思ったが、その顔は優しそうでもある。

「それを開けて良い事なんか無い」

男はそう言いながら優菜の隣に座った。

「どう言う事ですか？」と優菜は訊ねたが、男は「何時頃廻した？」と質問をかぶせた。

優菜は、たじろぎながらも返事をした。

「昨日です」

「昨日か。じゃあもう場所が変わっているな」

男は少し落胆気味になった。

「ところで、あなたは？」

「俺は、ルポライターさきた まもるの崎田さきただ。崎田まもる守」

「るぼらいたー？」

その聞きなれない言葉を繰り返す。

「黒いガチャガチャに関して色々調べているんだよ」

崎田はそう自分を紹介すると、優菜が何故ガチャガチャを引いたのか？ 事情を聞き始めた。

優菜がこの公園でサンと出会い黒川に恋をした事。

京子達から虐めを受け、ガチャガチャを廻させられた事。

黒川が変わってしまった事。

崎田は、手の平サイズのメモ帳に走り書きをしながら話を聞いていた。

そしてペンが止まった。

「なるほどね」

「でも、そんな事聞いてどうするんですか？」

「いや、俺は今までもガチャガチャを廻した人間と会い、色々な事情を聞いているんだ。ガチャガチャは神出鬼没。だが、もしかしたら何かしらのパターンがあるのかも知れない。それとも何かの理由により選ばれているのかも知れない。その目的は？ なぜ存在するのか？ 俺は、それを知りたいんだ」

先程とは打って変わって熱く語る崎田に、何か内なる物を感じ取った優菜。

「それを知ってどうするつもりなんですか？」

すると、崎田は膝の上で手を組み強く握った。

「その存在を世間に公表して、黒いガチャガチャをぶっ潰す」

「どうして？」

すると、崎田は財布の中から一枚の写真を優菜に手渡した。そこには綺麗な女性が笑顔で写っている。

「綺麗な方ですね。彼女さんですか？」

「婚約者だ。真由美^{まゆみ}って言うんだ。でも……死んだんだ」

その言葉を聞いて、優菜はどう返事をすれば良いのか迷った。慰めれる程の自分でもなければ、同情するのも可哀しい。かと言って中途半端な返事も失礼に値する。

「正確には黒いガチャガチャに殺されたんだ」

「えっ!？」

その言葉だけは咄嗟に出た。

「君は一つ勘違いしている。黒いガチャガチャは『恋の御呪い』なんかじゃない。ある人間は金持ちになり、ある人間は相思相愛。ある人間は大切な人が甦り、ある人は歴史に名を残すような偉業を成

し遂げ、またある人は歴史に悪名を刻んだ。他にもあるが、その多くが死んでいる。ガチャガチャによって」

崎田は地面にスクリーンを見るかのように見つめながら語った。そこまで聞けば、崎田の婚約者がどうして死んだのか予想は付く。

「もしかして、崎田さんの婚約者の方はガチャガチャによって死んでしまったんですか？」

「『死』を引いたんだ……って、何で会ったバカリの君にこんな話してんだろうな」

崎田は苦笑いをしながら謝った。

「とにかく、そのカプセルは開けるんじゃない。君自身が死んでしまいかもしれない」

「じゃあ、私はどうすれば……」

優菜は、俯きながら弱弱しく言った。

すると、崎田は優菜の目を真剣に見つめながら諭した。

「黒川君を救え」

「えっ？」

またも意味の解らない言葉に困惑する優菜に崎田は説明を続けた。

「いいか。ガチャガチャの力は呪いと同じ、まさに『御呪い』さ。

黒川君が下焔って言う女の子を好きになっているのも、ガチャガチャの呪いの力だ。つまり、黒川君本人の意思じゃない。それが黒いガチャガチャの力の真実でもある。引いた本人が誰かを求愛すると、求愛された本人の意思とは関係無に好きになってしまう。そのなんて虚しい事か」

「じゃあ、黒川君は無理やりに好きになっているんですか？」

「そうだ」

「でもどうやって救えば良いんですか？」

崎田は、優菜の手に乗っているカプセルを見据えた。

「もう一度、下畑にカプセルを開けさせるんだ。黒いガチャガチャは二回引くと、一回目の効果が訂正されるんだ。もし、君が下畑にカプセルを開けさせ、求愛の呪いが訂正されれば黒川君は元に戻る」

崎田がそう説明していると、優菜はほとんど元気を失っていた。

「どうしたんだ？」

「私には……そんな事、怖くてできません。あの下畑さんにカプセルを開けさせるなんて、怖くて……怖くて。自信が無いんです」

「君はまたそうやって戦う事から逃げるのか？」

急に冷たく、だが強く言った崎田。

「確かに、虐められた事は君に完全に非が無く相手が完全に悪いかも知れない。だが、戦おうとしないからこそ今までずるずると続いて来たんじゃないのか？ この世の中は建前上は綺麗事を並べているが、本質は弱肉強食だ。太古の昔から変わらずな。誰も助けられない。自分の足で立ち上がって向かって行かなければ何も手に入らないんだ。だったら、下畑と戦え、黒川君を取り返せ。その手で。強くなるなら今しかないだろ？」

優菜は、目に涙を浮かべながらもその顔には力が漲っていた。

崎田の言った事は、完全に的を得ていた。

確かに優菜は、今まで、色んな事から逃げていた。

人見知りもそうだ。

虐めを受けていても慣れる事に徹していた。

だが、それでは人間として何にも進歩しない。一生逃げの人生で終わってしまう。

自分が変わる事で、強くなる事で黒川を取り戻せるなら、崎田の言う通り今しかないのだ。

「俺みたいに、取り返しの付かない事になって悔やんでも仕方無いんだ。君にはまだ……戦うチャンスがあるだろ？」

優菜はゆつくりと力強く頷いた。

「でも、どうして私に？」

すると、崎田は一言言い残し公園を去って行った。

「もう、黒いガチャガチャによって後悔する人間を増やしたく無いんだよ。特に善人でな」

次の日。

優菜はカプセルを学校に持参した。何としても京子に開けさせる為に。

だが、なかなか話しかける隙も無く、目に映るのは黒川との目を覆いたくなる程の光景ばかりだ。

それを見る度に、心が折れそうになった。

だが、キスをせがむ黒川の顔は、悲しそうにも見えた。そう見える程、何としても助けたいと優菜は心に誓い続けた。

しかし、無情にも時間は過ぎてゆく。

昼休みになると、優菜は京子の仲間に連れられ女子トイレで暴行に耐えた。

ただ耐えていただけでは無い、優菜は、今までは涙を流し倒れていた。だが、今日は涙一つ見せず、京子の仲間を睨み付けた。そして何時までも地面を踏みしめ立っていた。

「デメエ、何だよその目は？」「カスが調子に乗ってんじゃねえよ」

全ては黒川の為に。

結局下校となった。

今日は、京子はキャバクラのバイトらしく一人で駅に向かっていった。

今こそがチャンスだと思い、跡をつける。

人目に付く所はなるべく避けたいと思っていると、いつもの公園へとやって来た。

すると、京子が振り返り優菜に声を掛けた。

気付かれていた。

「何私をつけてるの？ キモイんだけど」

優菜は、自分の柄では無かったが、初めて考え抜いた嘘を京子に付いた。

「下畑さん。黒川君ともっと仲良くなれる御呪いがあるの知ってる？」

「啓次と？」

京子はあっさりと食いついて来た。

そして優菜は黒いカプセルを京子に見せ付けた。

「一度引けば相思相愛。二度引けば……永遠に結ばれるの」
緊張で口がカラカラになる。

「本当に？」

そう言って、京子は優菜の手からカプセルを取り上げた。

「でも、どうして私に、そこまでするの？」

京子は、何か裏が有るのか？ 優菜の表情を伺いながら訊ねた。

「いや、調度もう一つあったし……」

「ふーん」

そう言って、京子は嬉しそうにカプセルを掴み手に力を入れた。

上蓋がゆっくりとスライドする。

優菜が最小限の唾を飲み込んだ。

だが、その時。

京子は、カプセルが開き切る前に蓋を閉めた。

予期せぬ行動に驚く優菜に京子は笑って見せた。

「アンタって本当に馬鹿じゃね？ 二回目引いたら一回目の効果が消える事くらい私が知らないとも思っただの？」

動揺し狼狽する優菜。

「そこまでして私の啓次が欲しいの？ 人を騙して彼氏を取ろうなんて最低じゃん。とっとと死ねば？ それともアンタがカプセル開けりゃ良いじゃん」

「じゃあ下畑さんは知ってるの？ 今の黒川君は本当の黒川君じゃない。黒いガチャガチャの呪いで意思とは関係なく下畑さんを好きでいるの。それこそ虚しい事だと思わないの？」

「思わねえよ」

京子は、優菜の必死の訴えをあつさりと却下した。

「そんな……」

「啓次の本当の意思なんて興味無いのよ。最高のイケメン引っさげて街を歩く。通り過ぎる女は皆、私に嫉妬する。私はそこらに居る女よりも上の存在として見られる。それが全てよ」

「それこそ虚しいよッ」

優菜は目に涙を浮かべて訴えた。

優菜は黒川の内面までも全てを愛したが、京子は黒川を自分を輝かせるステータスとしか見ていなかったのだ。

「これだから餓鬼は馬鹿よね。自分を高めりゃ更に良い男と巡り合い、最後は金持ちと結婚してハッピーエンド。内面で結婚して金も無けりゃ何の為に生きてるか解んないじゃん」

これがキャバクラで働き導き出した京子なりの答えかも知れないが、今の優菜には理解できなかった。

「ほら、さっさと開けるよ」

そう言っつて、カプセルを優菜の頬に押し付ける京子に抵抗する。

お互いに揉み合いになり、カプセルが地面に転がって行ったが、それでも二人は叩き合い、髪を引っ張り合った。

「啓次を渡すもんかッ」

「本当の黒川君を返してッ」

そこへ、サンを連れて散歩をしていた黒川が通りかかった。

黒川は、優菜と揉めている京子を見て、慌てて京子を助けに入った。

サンの首輪についているリードを手放し、京子の前で仁王立ちで構える。

「大丈夫か、京子」

京子は涙を流しながら「コイツが急に襲って来たの」と訴えた。間違いなく嘘泣きだ。

「違うの黒川君。私は黒川君を助けようとして……」

「うるせー。うぜえんだよテメエ」

今の黒川には、優菜の言葉など聞く耳も無い。

すると京子は、優菜を指差し冷たく言い放った。

「啓次。アイツを二度と私達の前に現れる事が出来ない程、ボロボロにしてあげて」

その言葉に返事をするかのように笑みを見せると、黒川は優菜の許へと歩み寄り胸ぐらを掴み上げた。

睨み付ける黒川の瞳を悲壮感溢れる眼差しで見つめ返す優菜。

心で何度も念じた。

——「黒川君助けて」と。

そう懇願した瞬間、黒川の硬く大きな拳が優菜の柔らかい頬を弾いた。

余りの重さと痛みで、優菜の視界が横のラインを残し、気付いた時には砂利の地面に寝そべっていた。

黒川は間髪をいれず、横たわる優菜の制服を掴むと強引に持ち上げた。

そして腹に拳を突き入れる。

優菜の体かくの字に曲がり、内臓までもを駆け巡る痛みで気を失いそうにまで陥った。京子達の暴力の痛みなど比でも無いくらい、

今までに感じた事の無い苦痛だ。

そのまま優菜の顔が左右に弾かれ、何度も何度も硬い拳に打ちつけられ続けた。

目蓋は赤く腫れあがり、頬も腫れ、口と鼻の周りには涙と血が混じった液体と砂利で汚れている。

もう黒川を助ける力も無い。

これで本当に終わりなのかと、優菜は絶望の中で諦めかけた。

遠のく意識の中、何かの声が優菜の耳に微かに届いた。

そして、黒川の手が止まった。

それは、サンが必死に辞めさせようと黒川に向いて吠えていたのだ。

甲高く吠え、時に豚の鳴き声のような声を出しながらも懸命に止めようとしていた。

黒川の手が緩み、解放された優菜が地面に崩れ落ちた。

「サ……ン」と切れた口の痛みを感じながら弱弱しく優菜はサンの名前を口にした。

また黒川も、記憶の片隅に封印されていた物が必死に出て来ようとする感覚と戦おうとしていた。

そんな二人の心を結びつけるサンと言う犬が目障りだと感じた京子は、余りにも酷い命令を黒川に伝えた。

「啓次。その犬を殺して。コイツとの思い出なんて要らないでしょ」

その時、一瞬だけ黒川の表情が凍りついたのを優菜は見逃さなかった。だが、直ぐに邪悪な表情へと戻ると、吠え続けるサンの腹に思いっきり蹴りを入れた。

サンの甲高い悲鳴が公園内に木霊した。

優菜の目の前で横たわるサン。

だが、サンは再び立ち上がると黒川に向かって吠え始めた。

「しつこい犬。片目が開いてないし、何？ その豚みたいな声は？」と笑う京子は、ベンチのブランコの脇に転がっていた太い木の枝を掴み上げると黒川に投げ渡した。

「駄のなつてない犬はそれで御仕置きしてあげな」

黒川は、ゆっくりと木の棒を空に掲げた。

そして一気に振りかぶる。

「止めてええッ」

優菜の必死の叫びも虚しく、黒川がスイングした木の棒はサンの頭部を弾いた。

またもサンの悲鳴が鳴り響く。

だが、それでもサンは諦めない。

震える足で地面を踏み締め、弱弱しくも黒川に近づく。

このまま、続けても間違いなくサンは殺されてしまう。

優菜は地面に這いつくばりながら必死にサンに声を掛けた。

「もう良いから、逃げて。サンッ。行っちゃダメッ」

「やってッ。啓次」

幾度となく振りかぶる木の棒は、何度もサンを叩き続けた。

横たわり、痙攣するサンの姿に涙し絶叫する優菜は、自分の力の無さを恨んだ。

だがその時、優菜は見た。

泣いている……。

黒川が涙を流しているのだ。

涙を流しながらサンを叩きつける。

きっと黒川もこんな事は心の底から願っていない。

心の中で叫び、泣いているのだ。

戦っているのは、優菜やサンでもあり、黒川でもあったのだ。

黒川は、サンが動かなくなつた事を確認すると、血が付着した棒

を投げ捨て、サンの許に歩み寄った。

その時、黒川の足が止まった。

黒川の目に入った物。

それは、黒いカプセルだった。

おもむろに手にすると、首をかしげながら考察する。

京子は黒川の背中越しで、何を手にしたのか確認できなかった為、振り返るよう命令した。

「どうしたの啓次？ その犬死んだの？ ねえ、こっち向いて」

そうして、黒川が振り返ると手に持っていた見覚えのあるカプセルが目に入り、目を疑った。

「ちよつと、それを開けちゃダメッ」

京子はカプセルを取り上げようと駆け寄ったが、黒いカプセルは黒川の手の中で二つに別れた。

途端に、黒川の手が京子の喉を掴み締めつけた。

「ダメエ……それでも人間かよ？」

怒りに満ちた黒川が京子に反旗を翻した。

一体何が起こったのか？

黒川の手から一枚の紙が舞い落ちた。

優菜は、ゆっくりと立ち上がるとサンの許へ向かった。

まだ息はあるが、衰弱しきっている。

「黒川君ッ」

優菜が振り返った時、黒川は京子を殴り続けていた。

京子は必死に防御しながら悲鳴を上げた。

「止めて、顔は止めて。顔は止めてッ」

「黒川君、サンがッ」

その言葉に手を止めた黒川は、慌ててサンの許に駆け寄った。

「サン、ごめん。俺は何て事を……」

そう言いながら、優菜の傷を見た黒川は、至る所が腫れあがり血

で汚れる顔に心を痛めた。

「ごめん。俺……」

「大丈夫、分かってるから。それよりもサンが……」

その後、二人は急いでサンを動物病院へ連れて行った。

いつもサンを見ている掛かり付けの医者は、サンの容体と優菜の傷に動揺しながらも、緊急でサンの治療に取り掛かってくれた。

二人は、待合室でサンの回復を祈った。

心から愛しているサンを自分の手で死の淵に追いやってしまったと言っ後悔と、自分への激しい憤りで黒川は、自分の頬を力強く殴った。

「クソッ」

暫くすると、手術を終えた医者が待合室に現れた。

優菜と黒川が駆け寄る。

「サンは!?!」

「生きてんのか!?!」

白髪混じりの髭を生やした医者は、難しそうな表情で「一命は取り留めたが、まだ油断を許さない……後はサン君次第だ。意識が戻れば無事だろう。それに、生まれつきの鼻の病気もあり、十分な呼吸もできない為、今は機械で酸素を送っている状況だ」と説明をした。

悔しさで歯を食いしばる黒川を見ながら、医者は、気になった事を訊ね始めた。

「サン君は、頭部、腹部の骨が骨折し、全身打撲も見受けられる。

……一体何があったんだ?」

医者 of 真剣な眼差しに、黒川は自分がやったと苦渋の表情で告げようとした。

「お、俺が……」

「不良に虐められていて、私と黒川君で助け出したんです」

優菜は、黒川にとっても苦しく辛い現実を認めさせない為に嘘をついた。

その時、サンがいる部屋から警報音が鳴り響いた。
慌てて戻る医者。

血相を変える黒川と優菜。

「おい、鈴谷ッー!!」

優菜は、一縷の望みを掛けて、度物病院を抜け出した。

一縷の望み……。

——それは黒いガチャガチャの事だった。

昨日会ったルポライターの言葉が真実なら、サンが助かる可能性だつてある。

今の優菜には、黒いガチャガチャのデメリットの事など頭に無かった。

とにかくサンを助けて、黒川の笑顔を取り戻したい。
その思いだけで、夜道を疾走していた。

二日前に黒いガチャガチャがあつた場所には、駄菓子屋すら無くなっており、ガチャガチャの影すらもなかった。

「一体、どうなつてるの？」

幻を見ていたかのように、ただの空き地が存在している。

その場を離れ、優菜は宛ても無く、彷徨い始めた。

息を切らしながら、辺りを見回し走っていると、いつもの公園にルポライターの崎田を発見した優菜は、黒いガチャガチャの行方を知っているのかも知れないとの淡い期待を抱きながら声を掛けた。

崎田は、地面に落ちていた紙切れに気付き、広い上げながら優菜の事情を聞いた。

「そうか。コレを引いたのは黒川君か」

そう言いながら、手で持った紙を見つめる。

そこには「無」と書かれていた。

「黒川君に掛けられていた呪いを『無』が掻き消したんだ。下畑のガチャガチャの効力も依然続いているだろうが、もう黒川君には効かなくなっただ。中々面白いじゃないか」

そう言って笑う崎田だが、今の優菜にはその状況に付き合っている場合では無かった。

「あの、だから、黒いガチャガチャの行方をご存じなら教えて頂きたいんです。サンを助ける為に」

「例え知っていても、絶対に教えない」

「えっ？」

予想外の答えに、鳩が豆鉄砲を食らったかのように優菜は驚いた。

「前にも言つたら、逃げるなど。事情は分かる、だつたら黒いガチャガチャなんぞに頼らないで、自分の思い、黒川君の思い、サンの心を信じて立ち向かえ。君はまた、逃げようとしている。でもサンは頑張っているんだ。黒川君も。その思いをくだらないガチャガチャ如きで踏みにじるんじゃない」

優菜は暫くの沈黙のあと、揺らぎの無い思いが宿った表情で頷いた。

「……その後、彼女は動物病院へ戻り、後の彼氏となる黒川とサンの無事を祈り続けた。その願いは叶い、三日後に意識が戻ったそうだ。この時、初めて俺は、ガチャガチャの力に頼る事無く人生を切り開いた人間を見る事が出来た。……嬉しかった。人の欲望に漬け込むガチャガチャの呪いから自力で脱出する事は極めて難しい、だが、俺が力になる事によってその呪いから救い出す事が出来れば、死んだ真由美も浮かばれる様な気がした。この件がきっかけで俺は、ガチャガチャに苦しむ人を助けようと思ったのだ。……そして、彼

女を苦しめていた下畑は、ガチャガチャの魔力でキャバクラ界でもトップに上り詰めたが、大物バンドグループのリーダーに心を許し、ドラッグに溺れ朽ち果てて行った』

崎田の住むマンションの一室で、ボイスレコーダーから流れている言葉を聞いていた一人の男。

「崎田……。そう言う事だったんだな。お前の思いは無駄にしない、仇は俺達が取ってやる」

男は、そう言うつと、写真や新聞紙などが壁一面に張り巡らされている中から、唯一手書きの一枚の絵を抜き取った。

それは、崎田が最後に書き遺した物。
一体どんな秘密が隠されているのか？

第二話 おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8344q/>

Π α ν δ ? ρ α — パンドラ —

2011年6月3日17時10分発行